治癒の現象学

青年期の心を考える会レポート　111007　長谷川

第四章　超越論的テレパシー
―２人で作る創造性

・ダイアナ、５才の女の子。弟の病気で鬱になっている母親とウィニコットを訪れる
・母親の鬱は理解不能。母の泣いている理由を説明し不安を解消させ、テディベアのぬいぐるみで「子どもの世話をする母さん」を演じるごっご遊びをすることが治療的に働いた
・ウィニコットがダイアナがポケットに入れていたテディベアを使って『テディベアに耳を当て「何か言っているよ」』『赤ちゃん達が見た夢が床に散らばっているよ』と触発
・対人関係の中で展開する創造性がダイアナの成長と母親の治癒の本質をなしている
・遊ぶことの中でこそ、患者は創造的になり得る

☆＜知覚的空想＞ perceptive phantasie フッサール
・石を石として知覚しながら「おにぎり」を空想する
・クリアなイメージもモデルもない空想
・言語の現実的な作動がなくても共通の文化的基盤があればこの知覚的空想は共有される
・「反省」「問い」「誤解」「嘘」が成立する時点で高次の象徴構造が介入し「知覚的空想」の次元を超えてしまう
・演劇（「知覚的空想」の次元）の物語全体は理念化されようがない
・概念の共有ではなく空想の共有である「超越論的テレパシー」とでも名付けられるような現象が、常に人と人の間では成立している

☆超越論的テレパシーは自然発生的で人を巻き込む力を持つ
・映画や舞台を見るときは、否応なく劇を体験してしまう
・空想それ自体の自然的発生と自発的展開がある
・（少なくとも潜在的にでも）相手がいない限り、知覚的空想は成立しない。知覚的空想はコミュニケーションとして成立する
・知覚的空想は構造上対人関係を組み込んでおり、超越論的テレパシーという用語が必要

☆知覚的空想の本質には「見られる」という要素がある
・私の空想の産物が相手によってみとめられることで実在感を手に入れる
・私の表現がまわりの人から無視されたら、私自身が存在していないのと同じである
→　母親からの照らし返しを欠いたため大人になってからも自己感の希薄さに苦しむ事例
・思考 cogitatio が自己感を持つためには対人関係が必要

☆ごっこ遊び　→　映画、演劇

・子どものウルトラマン対怪獣の遊び、二重の対人関係が作動

・二重の間主観性、空想の共有と伝達がポイント

＜共感＞私の空想身体を用いて相手の生きる身体と共鳴する働き。共感覚的な間身体性（ミラーニューロン系の作動）

＜超越論的テレパシー＞相手の空想内容を共有する働き

☆超越論的テレパシーと創造性

・知覚的空想は自分の可能性を超えるものが自分の中に誕生する逆説が日常的に起こる場

・超越論的テレパシーが成立している限りにおいて、自分の可能性を超える可能性が生まれる

第五章　椅子とうんちの物語

—行動の型と現実を追い込む状況X

＜症例レオン＞

・ナチスドイツ占領下のパリにおけるユダヤ人少年レオンの精神分析治療

・読み書きができないうえに運動機能の発達が非常に悪い八歳の小学生

・音符は読み上げることはできないが楽譜を見たとおりにピアノで弾ける

・超越論的テレパシーの発達が不完全

→　象徴構造を超越論的テレパシーに組み込む必要がある

・縫子をする両親が働くアトリエで、三歳半まで椅子にベルトで固定されて過ごす

→　情動性と運動感覚と言語能力が連動・統合していなかった

・粘土遊びで人形と椅子を作ることができるようになると、だんだん歩行がうまくなった

→　作品として表現される空想身体の組織化が生身の身体の統御と連動

・うんち「ごっこ」という知覚的空想のなかで、レオンは母から自立する

→　知覚的空想の成立と自他の成立が相関している

・話すことができて歩くことができるという力の獲得に、言語構造の身体への書き込みが関わっている。単に文法を覚えるのではなく、表現と行為の型という身体化した言語構造の獲得こそが、現実の触発に対する「意味」生成の支えとなる

第六章　原ユートピア

—現実の反転について

・無意味な現実が「意味」へと反転される際の内容上の地平・極限値。死や社会的疎外を反転する可能性、死者との再会の地平を描き出す力
・フロイトの『夢解釈』のなかで、父親が死んだ子どもと出会う夢がある
・そこで、子どもとの再会、子どもの生命の延長という願望充足を夢は実現していて、それゆえに睡眠が延長された（フロイト）
・父親が直面している現実は「子どもが死んだ」ことであり、「子どもが熱に苦しんでいる」という夢の内容は、子どもの死という現実の反転であり、時間の流れの逆転（著者）
・夢では現実がそのまま反復しているのではなく、現実と現実の反転のせめぎあいが夢の内容として反復されている
・死者と生者が出会う地平、生と死の区別が無効になる地平が開かれることで、疎外的現実の受容が可能になっている
・疎外的現実を逆転する地平・・・・を「原ユートピア」と名付る
・夢はこのように疎外的な現実を何らかの仕方で受容し、ぎりぎりのところで外傷となることを防いでいる
・無神論者、無宗教者、唯物論者であっても、自分の子どものためには天国を用意するし死者を想起する。この否応なく天国を構想してしまう機能、想起のなかで死者と語り合う機能を今問題にしている。原ユートピアという生得的機能は、疎外的現実を反転するという空想の内容上の地平である
・人間に生来書き込まれた夢という意志を超えた機能において、この疎外的現実を止揚する地平が切り開かれうる。空想内容の地平は原ユートピアを形成する
・疎外的現実それ自体は受容できない。~~しかし~~、ある高次の地平すなわち生死を包摂する地平である原ユートピアが開かれ、これが物語可能性という別の地平と交差したときに、疎外的現実をめぐる物語を形成しうる　しかし

終章　ジャン・ジュネの歌
―超越論的テレパシーに抗して

・フランスの小説家ジュネは、生後すぐに母親によって捨てられ（父の身元は不明）、施設で育てられたのち養子先を脱走して窃盗などの犯罪によって施設と少年院、身元引受人のあいだを転々として育った
・ジュネの「意味」生成は対人関係の喪失を前提とし、治癒ではなく刑罰をもたらす犯罪を希求する。ここでは刑罰こそが治癒となる
・歌によってジュネは牢獄や犯罪、犯罪者といった世界から排除された存在者を称揚し、美へと高める
・現実を「意味」へと変換することで受容するプロセスそのものは本書の議論と一致する

・作品が実世界を反映するのではなく、歌われた空想世界こそが実在となる。この反転された歌の世界において、犯罪を起点として世界全体が生成し自己組織化することになる
・泥棒の空想身体の組織化として世界全体が成立する
・もちろん「現実 le reel 」の水準と「実在 la realite 」の水準を区別する必要がある
・歌という実在の世界を産出するのは、詩人を触発する現実があるからである。ジュネにとっての現実とは、強盗・売春・乞食・収監・死刑といった「聖潔 saint 」な行為とそれにともなう侮辱・屈辱・苦痛・性的快楽といった情動である
・ジュネを触発する現実の言語化は、反転を必要条件とする。反転の地平として原ユートピアの必要性が確認される
・存在し得ないはずの現実は歌において実在化する。プルーストの登場人物たちが記憶と名においてのみ実在したように、ジュネの愛人たちは不在ゆえに詩の中に実在する

結語　空想身体の自由としての治癒

・現象学はおそらく「人間の経験」というかなり狭い領域を扱う学問である
・現象学は一種の数字を使わない「科学」である。多数の学者が方法と成果を共有するので、たえず間違いは訂正され、知が伝承される可能性を持つ。たとえ新しい概念を作り出したとしても、それは分析者の個性の発露ではなくて、新しく発見された現象や構造への目印である
・「治癒」という概念は「現実の触発のもとで空想身体の組織変化」をさす名称
・フッサールと対照すると、対象認識の代わりに現実による触発、知覚と運動感覚の代わりに空想身体の組織化を出発点としている
・創造性とは、現実による触発のもとで行われる「意味」の生成である。「意味」とは空想身体のそのつど新たな組織化の運動である
・空想身体は単独では展開の自由を持たない
・他の人の空想身体との接続においてはじめて、本人の創造性、相手の創造性の吸収、二人の相乗効果という形で思いがけない変化が生まれる
・空想身体同士の接続と空想身体の可塑性を可能にする構造のことを超越論的テレパシーと呼んだ
・芸術に限らず表現には型、スタイルが必要になる。「意味」生成はそれを内側から秩序づける枠組みを必要とする
・現実を超越論的テレパシーにおいて引き受けるためには、現実を状況 X として囲い込む枠が必要である。これが原初的なカテゴリー機能である
・行為の型は形式的な枠だが、さらには「意味」生成の運動を内容から支える枠組みがある。これは外傷を意味へと反転する可能性を想像する能力としての原ユートピアである